

617. 車椅子体験が子どもたちに与える影響

— 連想調査法を用いて —

【キーワード】

車椅子・連想調査・共生

日浦病院

高沢浩太郎・村嶋幸四郎・富永 雅之

吉野 克也・志田 啓穰

長崎大学医療技術短期大学部

中野 裕之・穠山富太郎 (MD)

長崎大学教育学部

高原 朗子・上藪恒太郎

【はじめに】

近年、障害児とその家族が安心して地域で生活できるような療育支援体制の確立が重要視されている。当院も、地域療育を支援する一医療機関として積極的に活動してきた。その活動を通してわれわれは、障害児のみに着目するだけでは、本当の意味での生活支援になりえないのではないかと考えている。つまり、障害の有無にかかわらず子どもたちは“生活”をしているのであり、そこには子ども同士のさまざまな相互作用が働くのである。その流動的かつ多様化する子ども社会において障害児と健常児の「共生」を追求することも、支援者としての必要不可欠な活動といえる。そのためのアプローチの一つが車椅子体験学習である。車椅子を通して、子どもたちはさまざまな意識変革を迫られる。その変容する内容を具体的に明らかにし、共生社会を担う子どもたちに対する指導・援助の在り方を検討することが本研究の目的である。

【方法】

子どもたちの『なかよし』、『どうろ』、『くるまいます』に対するイメージが、車椅子体験学習の施行前・後でどのように変化するかを、連想調査法を用いて調査する。連想調査法(単一自由連想調査)とは、一つのことば(刺激語)に対して30秒(または40秒)の間で思いつくことば(反応語)を書き連ねてもらい、その反応語から対象となる集団全体の意識を明らかにするものである。

まず連想調査票を作成し、担任教諭の同意を得た上で、体験学習前に施行前連想調査をおこなう。そして体験学習終了後に、施行前調査と同様の施行後調査をおこなう。

刺激語は無関係語を含めて全部で6語である。刺激語の提示順序は、①山、②ゲーム、③なかよし、④どうろ、⑤さかな、⑥くるまいます、とする(①、②、⑤は無関係語)。指示は「〇〇から思いつくことばを書いて下さい」とする。連想時間は4年生と

6年生は30秒間、3年生のみ40秒間である。

車椅子体験学習では、2人の子どもに対して1台の車椅子を用意し、車椅子操作・介助の両方が十分体験できるように企画する。

【対象】

対象は、当院理学療法士が担当する子どもが在籍する普通小学校の3年生(14名)、4年生(13名)6年生(14名)である。4年生は過去に車椅子体験学習の経験はあるが、3年生と6年生は初めてである。

【データ処理】

連想調査から得られた結果は、Windows95で動作するMicrosoft Excelと藤木らが開発した連想マップ処理アドイン(Ver.2.96)を用いて処理した。それによって反応語総数、対反応語確率、対反応者確率、連想距離、エントロピを得る。それらから求めた情報を用いて連想マップを描くことにより、刺激語に対する反応語の構造・関連を視覚的に把握することができる。

【結果】

各刺激語に対する子どもたちの反応語総数は、年齢とともに増加した。エントロピは、多くの刺激語で施行後増大する傾向にあった。施行前と施行後の比較において、刺激語『なかよし』では「家族」、「親友」、「やさしさ」が増大した。刺激語『どうろ』では「高速道路」、「歩道」、「アスファルト」、「かたい」が増大した。刺激語『くるまいます』では「こぐ」、「乗る」、「シート」、「ブレーキ」、「段差」、「ゆっくり」、「難しい」、「きつい」が増大した。

【考察】

反応語総数が年齢に伴い増加したことと、施行後でエントロピが増大したことは、車椅子体験が子どもたちに意識の拡散をもたらしたことがわかる。つまり、体験学習によって子どもたちが考えを深め、イメージを広げるような影響を受けたのである。今回の車椅子体験学習はまさに深化拡散的な学習の一形態といえる。一方、一定の知識や概念の獲得が中心となるような学習では、子どもたちのイメージが収束されるためにエントロピは減少する。

刺激語『くるまいます』では、実際に車椅子に乗ったことにより、動的表現や車椅子の構成部品、学習内容が表出したと考える。

また刺激語『くるまいます』に対して「便利」と「不便」という相反する反応語が得られたことは興味深い。これを説明するには、子ども個人の障害観の相違を採用すべきであろう。

学童期の子どもたちに対して、車椅子体験のような感情を揺さぶられる課題は、慎重に実施しなければならない。適切な指導の介入が、子どもたちの共生観の発達に良い影響を与えうると考える。